

# ばかな汽車

豊島与志雄

青空文庫



——長いあいだ汽車の機関手きかんしゅをしていた人が、次のような話をきかせました。——

\*

汽車の機関手きかんしゅをしていますと、面白いことや、あぶないことや、つらいことや、それはずいぶんいろいろなことがあります、そのうちでかわった話というのは——

そうですね……もうずっと昔むかしのことです。汽車をうんでんして、ある山奥おくを、夜中よなかに走っていました。機関車きかんしゃの前の方の小窓こまどからのぞきますと、右手はふかくしげった山のふもとで、左手には小さな谷川やがわがながれていまして、二本のレールが ажおじろくまつすぐに つづいています。その上を、汽車は速すみ力をまして走っています。後うしろの方につづいてる車では、もう乗のつてるお客きやくたちもたいいていうとうと眠ねむつてる頃ころで、あたりはしいんとした山の中の夜で、ただ私たちだけが起きていて、かまに石炭せきたんの火をたき、レールの上を見はりながら、汽車をどうこうと走らしています。もしなにかまちがいでもあろうものなら、何百人もの乗客じようきやくたちの命いのちにかかわるんです。

ところが、機関車の小窓から前の方を注意していた私は、思わずアツと声をたてました……。線路わきにぼつりぼつりついてる電燈の光が、とおく闇にまぎれて、レールもみわけのつかないその先の方に、大きな眼玉のようなヘッドライトの光をかがやかし、煙突から煙をはいて、まっくらな大きなものが、ひじょうな勢で走つてきます。汽車です。汽車が向うからくるんです。

そのへんは、単線で、一筋の線路きりありませんでした。両方から汽車が走つてくれば、ましようめんから衝突するばかりです。それをさけるために、タブレットの仕方、停車場と停車場の間には一つの汽車しか通さないようにしてあります。それがどうしたまちがいか、たしかに向うから汽車が走つてきます。

両方ともたいへん早く走っていますので、みるみるうちに近よつてきました。もし衝突でもすれば、どんなことになるかわかりません。いくたりの人が死ぬかわかりません。私はとつさに、汽笛をならし、制動機に手をかけて、汽車を止めようと思いました。火夫たちもみな立上りました。向うの汽車でも、汽笛をならしています。

ぜんそくりよく全速力で走つてる汽車をとめるのは、よいなことではありません。あまり急にどめますと、脱線してひっくりかえる心配があります。両方からぶつつからないう

ちにとめる、そのわずかなかねあいです。私たちはもう生きた心地もしませんでした。

向うの汽車はすぐ近くになりました。まっくらなすがた、煙をはいてる煙突、ぎらぎら光つてるヘッドライト……車輪のひびきまで聞えてきます。ぶつかつたらさいごです。

そのうち、こちらの汽車はしだいにとまりかけて、一つ大きくゆれてまったく止つてしまいました。と同時に、向うの汽車もとまりました。危いところでした。両方十七、八メートルしかはなれていませんでした。私はほつとしました。

そのまま、しばらくにらみあいのままでいましたが、さて、線路が一人筋なので、お互に通らぬけることができません。どちらか後しざりをしなければなりません。

私の汽車から、火夫が一人おりていきました。見ると、向うの汽車からも火夫が一人おりてきます。両方からやつていきました。

ところが、私は息もとまるほどびっくりしました。今まで、すぐ向うに、十七、八メートルばかり先の方に、煙をはき光をだし、音までたてていた汽車が、姿もなにもなくなつて、こちらのヘッドライトの光にてらされた線路が、ただしらじらと遠くまでうちひらけてるじゃありませんか。そしてなおふしぎなことには、そのきえうせた汽車からおりてきた火夫だけが、こちらからいく火夫の方へ、同じような足どりで歩いてきます。

私はおりていこうとしました。がもうその時、両方の火夫は線路の上でであつていました。立どまって、何か話してようでした。すると、こちらの火夫が、いきなり向うの男になぐりかかりました。とたんに、向うの男の姿がきえて、火夫は足もとに、なにかへんなものをおさえつけています。

私はいきなり、助手やほかの火夫といつしよに、機関車からとびだして、かけつけていきました。みると、火夫は大きな獣を力一杯におさえつけています。それは、年とつた一ぴきの大きな狸でした。

それでやつとわけが分りました。その狸め、汽車にばけて、こちらの汽車のとおりに進んできたところが、こちらがとまったので、向うでもとまって、それから火夫がおりて行くと、汽車の方を忘れてしまって、火夫だけにばけて、つかまってしまったんです。私たちははじめ腹をたてましたが、次にはおかしくなりました。そして狸にいいきかしてやりました。

「ばかだな、お前は……。ばけるものにことをかいて、汽車にばけるとはなんということだ。もし衝突でもしたら、お前はこなみじんになってしまふぞ。これから、もつと気のきいたものに、危くない者にばけるようにしろよ」

そして、食<sup>た</sup>べ残<sup>のこ</sup>しの牛肉のきれをやつて、はなしてやりました。狸<sup>たぬき</sup>は肉をもらつて、頭<sup>あたま</sup>をびよこびよこさげながら、藪<sup>やぶ</sup>の中へはいつていきました。私たちはその後<sup>うしろすがた</sup>姿をみおくつて、大笑<sup>わら</sup>いしながら、後<sup>おく</sup>らした時間<sup>じかん</sup>をとりかえすために、汽車を全速<sup>ぜんそく</sup>力<sup>りよく</sup>で走らせました。

まったく、ばかな狸<sup>たぬき</sup>です。汽車にばけるなんて、よくそんな危<sup>あぶな</sup>つかしいことができたものです。むてつほうにも程<sup>ほど</sup>がありますよ。





# 青空文庫情報

底本：「天狗笑い」晶文社

1978（昭和53）年4月15日発行

入力：田中敬三

校正：川山隆

2006年12月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ばかな汽車

豊島与志雄

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>